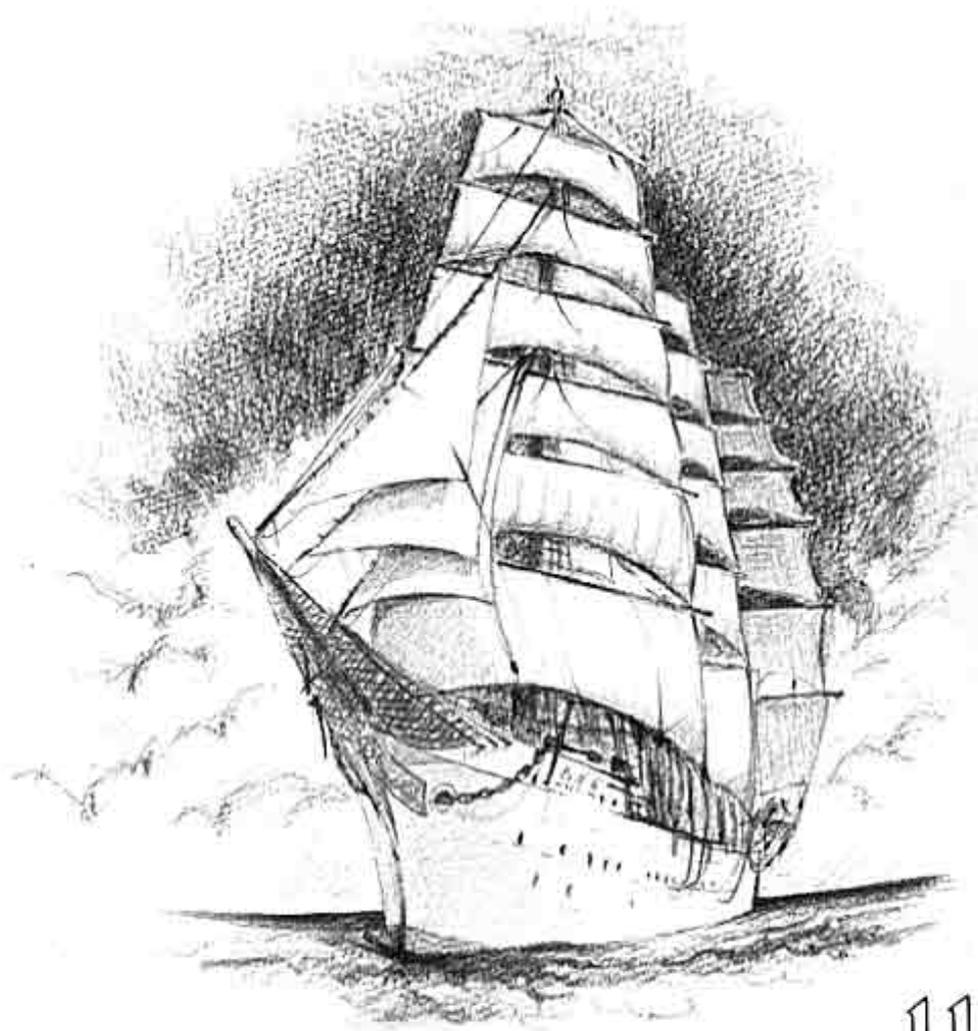


平成28年11月5日発行(毎月3日1回発行)
第56巻11月号(通巻688号)

風土



火照る冬瓜

南うみを

葛の塵這ひ寄る墓を洗ひけり

定家忌をきのふに九條家の芒

かなかなに覚めひぐらしの径帰る

地藏会の数珠擲まんと赤子来る

地藏会の西瓜地藏を隠しけり

刈る草の先をはたはたよろけ跳ぶ
片脚のこほろぎどうしても廻る
夕採りの火照る冬瓜こそ父へ
打つ鍬にカンカン当たる鴉の声
車座に湯気の枝豆どかと据ゑ（
原子炉へ鎌首もたげ葛の花
来賓の席空いてゐる秋つばめ



竹間集

同人作品



虫送り

岩木

茂

虫送る夜は上弦の月明かり
闇あをく匂ひ立ちたる虫送り
畦道に火屑零るる虫送り
虫送りしんがりに火を高く揚げ
虫送る闇の起伏に火を連ね
村の闇田の闇深し虫送り
虫送る火に川音の昂ぶりぬ

星流る

小林輝子

楯の葉に青筋揚羽日を避くる
黒松の岬より出づる雲の峰
九十九島の一つ青蘆茂るまま
踏切のかんかんかんと土用あい
地に敷ける芭蕉の花を象牙か
つく法師いのち惜しめとこ糸を張る
星流るけいじ氏二十七回忌

流灯会

田村すゝむ

流灯会大きく妻の名三ん文ん字
流灯のこの手離さばいつ逢へる
流灯の妻を手波で送り出す
大文字の第一画に火の手揚ぐ
寄せ書に残る余白や秋暑し
無駄と云ふ一日はなし時計草
百名山の大雪溪に杖を挿す

医王山

田中佐知子

二学期のひとつ机に供華の瓶
医王山蟬は法師に鳴き替はり
金婚の夫健啖に秋耕す
白露や虚子序文なる久女集
ふたりして離郷の身なり雁渡る
ふたり在ることのよかりし夜長かな
源氏読み露の夜明けを迎へたり

秋早し

工藤ミネ子

色褪せし農衣の背中稗を抜く
秋蟬の地声を継ぐ村三戸
走り根に走り根からむ苔の花
幣風にちぎれて宮の秋早し
「伏影」てふ村や秋蟬声太く
陽が廻り社に虫の一縷かな
水厚く右に別るる秋の川

獣道

柴田久子

炎昼を音なく過ぐる托鉢僧
初秋や犬同伴のレストラン
したたかに動く酸素器秋暑し
シースルーエレベーターや夕月夜
抜け道の参道が好ききりぎりす
残暑かな獣道より人現るる
いつの間に菜食派なりきりぎりす

涼新た

中村洋子

涼新た方三間の阿弥陀堂
赤々とこの世の闇に大文字
夏休み恐竜展の列につく
足元に波音を聴く夏の果
残暑かな輪ゴムで開けるジャムの蓋
竜胆へ低く屈みて風の来る
杓子庵中助記念館の小さき畑のキリギリス

鳥渡る

浜 福恵

沢蟹の子の怖れ知らずに生まれきて
水茎のごとく蛇くちなわ谷を泳ぎ着く
山の端に稚き齡の盆の月
真如親王追善供養蟬時雨
山に入る薬師如来の施餓鬼幡
老僧の白眉にまみゆ萩の風
彼岸には彼岸花咲く径かな
双体仏の肩に捧ぐる蔓竜胆

巢を留守に帰り仕度の家燕
大いなる帰燕の翼翻す
昼灯台帰燕の空の遙かなり
台風予報河口に鷺の立ちつくす
家々の明かりを遠く鹿の恋
田の乾され順に番号コンバイン
夕明し田一枚づつの稲埃
蔓延らさず絶やさず庭の芒かな
フウの木にフウの実高し鳶の空
行く雲やフウの木下の秋の声
年取島の水際に鴨の一番手
湾に五つの島に然^{しか}然^{しか}鳥渡る

山河集

同人作品



南うみを選

きちきちの飛んで川幅広くなり

布施まき子

新涼や抱かれし嬰の足のうら
釈迦堂へ秋暑の階を上りけり
秋の蟬波郷の墓のあたりより
朝顔や新仮名旧仮名使ひ分け

草原は少年の友きりぎりす

津川かほる

幽霊に花束届く夏芝居
白虎隊ねむれる山やつくつくし
下町の古き銭湯夕化粧
新涼や朝霧高原馬放ち

汲み上ぐる島の井水や鱗雲
枝折戸の風のゆらぎやきりぎりす
星とぶや金泥銀泥唐紙展

下山田美江

秋風や豆腐料理の三百種
忘却の多き八月八十路来る

赤石梨化

ちちははの墓の小さし法師蟬
八月や鳥籠になき鳥の影
八月の灯の青白き店構へ
ベイブリッジ浮き彫りにして稲光
てのひらの薄きに賜ふ新豆腐

土井ゆう子

師に声を掛けそびれたるサンガラス
合歓の花すべて加齢のせゐにされ
風鈴や湖にさざ波立つやうな
湯の宿や夕蜩に迎へられ
帰省子の言葉遣ひの変はりたる

京都御所

杉本薬王子

陽炎や「我が世の春」の屋敷跡
土御門弟邸跡
鳶の笛空に流るる春の水
祐の井の枝の白梅青みたり
向き合近衛邸跡 三句ふて亀話し合ふ石に花
糸さくら地に一面のいとさくら
風吹くと命の揺らぐ糸さくら
四圍一里御所一斉に下萌える
春雨の音を吸い込む御所の草
青鷺が足を漬けたる春の川
露の世の空蟬残る草の葉に
猛暑かな青鳩が来る水飲み場
雨止むとみ音とじ音の蟬の声
空蟬となりて聴き入る蟬の声
薬師門十葉の花盛りなり
黒揚羽白雲神社の手水舎に

第 39 回桂郎賞俳句部門佳

撫子咲く単身赴任の身の軽さ
桃の実は少し色づく御所の風
蝸や触れたき御所の臍石に
唐破風の鳥居に触れぬ百日紅
立葵若冲の待つ具眼の士
能楽堂簾立てかけ秋に入る
シヤガールの馬の目青く秋深む
米を磨ぐ水の澄みけり秋祭り
古稀過ぎて一人住む身や十夜柿
五位鷺や薄の風に動かざり
鳶高く鴨川の秋俯瞰する
秋成梨木神社 四句の塚に掛かれる萩の枝
萩咲くと新婦の影や控室
手水舎の真清水美し菊の紋
白萩の咲いて博士の歌碑と知る

◇特別作品◇

海のうた

島 玲子

港の灯遠くなりゆく星月夜
航跡に重ねて広し月の道
基隆^{キリン}の出港祝ふ秋暑し
少年の遠目差しや秋の虹
船上のワルツ秋ばら匂ひけり
回廊の古代彫刻小鳥来る
鷹の蛇遣ふ男や秋の雷
爽やかやサリーの人と笑み交し

城跡にとじこめられし秋出水
振り返る城壁高し秋の虹
仔牛出て渋滞続く霧の夜
マサラ・チャイ土産にもとむ月夜かな
町中を野牛の歩く長き夜
船内に居酒屋のあり月見豆
船旅の伊予人と酌む獺祭忌
海賊の潜む波路や霧深し
身に沁むや海賊の海波高く
踊唄アラビア海の揺れやまず
アデン湾自衛艦居る秋景色
波枕アラビア海の星月夜

風土独語／南 うみを



きちきちの飛んで川幅広くなり

布施まさ子

この句の面白さは、普段はそうとも思っていないなかった川の幅が「きちきち飛蝗」が飛び渡ったことで、あらためてその広さを知ったことです。飛翔時間の長い「きちきち」なればこそです。

青蜜柑たわわアフリカ見ゆる丘

堅山 道助

この句は想像力を駆使して世界を作りあげました。さてこの丘はどこにあるのでしょうか。「青蜜柑」から柑橘類の採れる地中海の島の小高い丘を想像します。どこまでも空気が澄み、コバルトブルーの海に向かって北アフリカが見えます。この作者の独特の眼は世界中を駆け巡り、その世界は雄大で爽快感があります。このような世界も「写生」です。「写生」は表現技術です。表現されたことばの世界にリアリティがあつてこそその「写生」なのです。

敗蓮や気配を消して休む人

森高 武

大きな葉が敗れ、風に鳴る「敗蓮」の様はうらぶれそのものです。その「敗蓮」の近くで休む人がいます。作者ははじめこの人物に気が付きませんでした。ざわざわと鳴る「敗蓮」に気を取られよく見ると人物がしゃがんでいるのがわかったのです。微動だにしない人物を「気配を消して」と表現しました。佳き措辞です。

幽霊に花束届く夏芝居

津川かほる

夏の芝居は納涼気分が求められ怪談物がよく演じられます。当然幽霊が出たり、殺しの場面があります。さて、おどろおどろした形相の幽霊に激励の花束が届きました。「幽霊」はニコリとせず、華やかな「花束」を受け取ります。いや笑ったほうが恐ろしいかもしれません。「花束」の違和感がこの句のポイントです。

汲み上ぐる島の井水や鱗雲

下山田美江

水道の通っていない小さな島でしょう。今、水しぶぎを上げながら井戸水を汲んでいます。空は一面の「鱗雲」です。近景と大景の取り合わせが清涼感を伝えます。「島の井水」から島を俯瞰しているような感覚を持ちます。

離陸機の影ゆく西瓜畑かな

内藤 静

「離陸後の影」ですので大きな影です。それが「西瓜畑」に映っているのです。飛行場のまわりに畑が広がっているのです。沖縄であれば軍用機の影になります。それにしても耳をつんざく音のなかでの農作業です。臨場感があり、緊迫感もあります。

朝からの照り強かりき世阿弥の忌

上辻 蒼人

能楽の大成者、世阿弥は陰暦八月八日に亡くなり、奈良の補蔵寺に眠っています。晩年は長男に先立たれ、佐渡に流されるなど不遇のままに没しました。それを踏まえると「朝からの照り強かりき」は世阿弥の生涯と響き合います。忌日俳句は人物を彷彿させるフレーズと取り合わせることが肝要です。(以下略)

風土集

南うみを選



守武忌ものの初めは粗にして野

川崎

豎山道助

青蜜柑たわわアフリカ見ゆる丘

青丹よし高円山の大文字

文豪に余生の蹉跎鳳仙花

枝豆に老いも若きもなかりけり

玉の汗名物うどん完食す

いわき

森高武

法師蟬浄土の庭を住処とす

餌撒けば雀集まる秋日和

敗荷の中に一花や浄土池

敗荷や気配を消して休む人

離陸機の影ゆく西瓜畑かな

川崎

内藤静

秋暑し隈なく映すCT図

夜半亭跡の一坪ちちる鳴く

きぬぎぬのうれひに鳥瓜の花

秋簾佃の路地に塵もなし

麦こがし朝餉の母の粥匂ふ

五條

上辻蒼人

白雨来て山畑精気呼び戻す

蝸を啼かせて郷に人気なし

朝からの照り強かりき世阿弥の忌

早稲穂出づ花掛水を早よ引かな

秋暑し寒暖計の赤き玉

神奈川

石井秀一

江の島を載せ八月の波頭

目瞑ればつくつく法師身一つに

海鳴りの名残りの簾通し来る

空き缶の転がつてゐる残暑かな

今年子の首もすはりて地蔵盆

福井

池田光子

地藏会の山盛りほほづき転がりさう

灼くる地を擦つて不漁の舟揚ぐる

明日捨てる本山積みに虫時雨

蝸やさざなみのごと日の斑ゆれ